

6章

自然資源の継承と形成

キャンパスの快適性や景観を向上させるためには、緑地等（植栽、並木、樹林地など）を、一体的、統一的な考え方のもとに、かつ継続的に、整備・維持管理することが必要である。2011（平成23）年には、「大阪大学緑のフレームワークプラン」が策定された（そのスタートラインは2005（平成17）年版キャンパスマスタープラン6章が元となっている）。広域におけるキャンパス緑地の位置づけや、生物多様性の重要性を確認しつつ、緑地および、広場や街路等の緑の整備と維持管理の方針をまとめているので、詳細はそちらを参照されたい。

6.1 全体の緑のコンセプト

本学のキャンパスにおける緑地等の現況と、キャンパスを取り巻く広域の視点から、全体の考え方を以下のように整理している。

- 北摂地域全体におけるキャンパス緑地の位置づけと、守るべき各キャンパスの良い点を明示する
- 維持管理（剪定や除草）から整備（工事）まで通した視点を設定する
- 生物の多様性や希少種についても配慮する
- 周辺自治体や地元、学生教職員との連携を進める

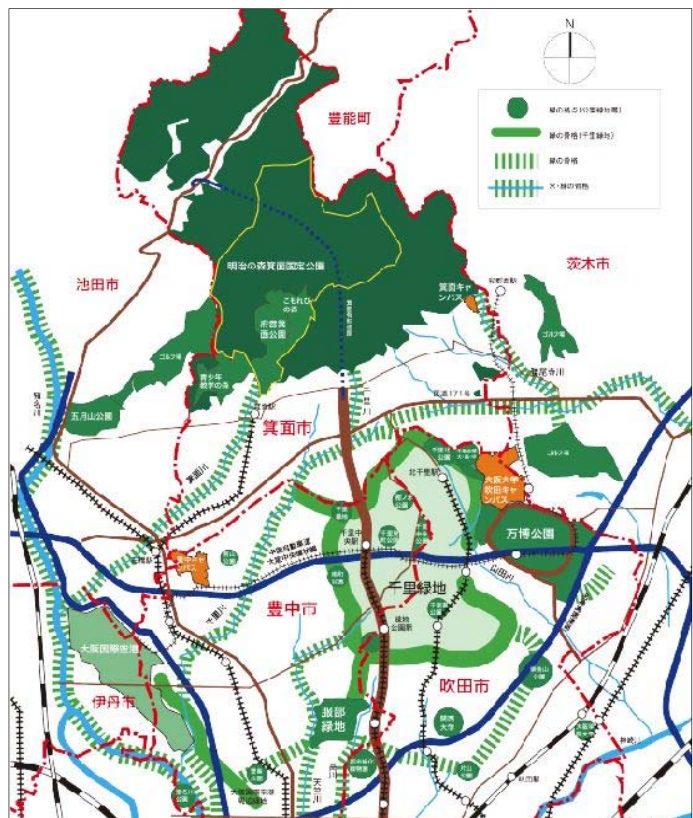


図 6.01 キャンパスを取り巻く広域の水と緑のネットワーク

6.2 各キャンパスの考え方

各キャンパスの関係性は図 6.02 のように整理できる。それぞれの
特徴と自然資源の継承と形成に必要な考え方を、以下に概説する。

但し、箕面キャンパスについては移転構想によって、これまでと全く異なる都市型キャンパスとしての考え方をする必要があり、本章での考え方はあくまで 2021（平成 33）年春に予定されている移転までの暫定的なものとなる。

(1) 豊中キャンパス

豊中キャンパスは全般に、剪定や間引きの行き届いていない過密な緑地が多い。またササやタケに侵食されて、生物の多様性を失いつつある部分もある。防犯上も見通しのよさは有効である。全体として密度を減らしながら、風や視線の通りがよい空間を形成してゆく必要がある。

特徴的なイチョウ並木の黄色や、サクラなどの色合いを大切にしながら、一年草や、池にあっては水生植物なども取り入れて、季節感や色合いがより豊かなキャンパスを目指してゆく。

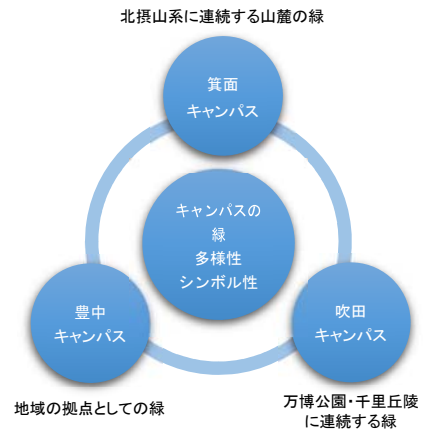
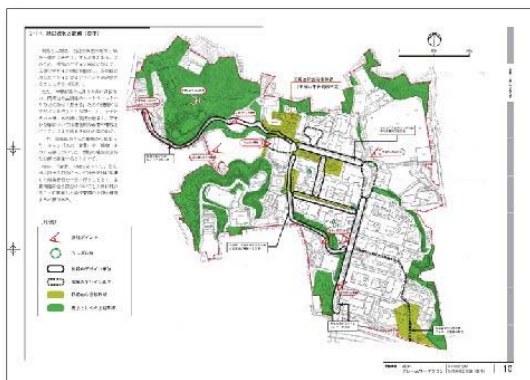
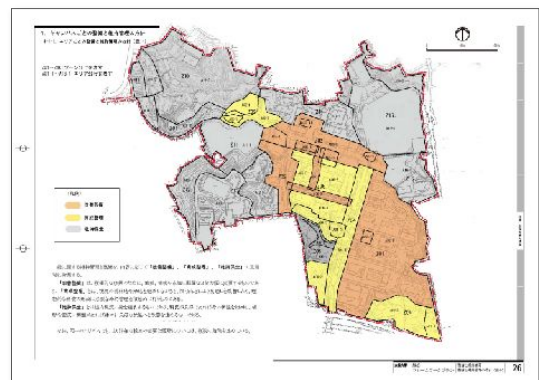


図 6.02 各キャンパスの緑のコンセプト



緑のフレームワークプラン 2 章
緑の現状分析(豊中)



緑のフレームワークプラン 4 章
エリアごとの整備と維持管理の方針(豊中)

図 6.03a 緑のフレームワークプランにおける豊中キャンパスの考え方

(2) 吹田キャンパス

吹田キャンパスは広大である。キャンパス内での緑の量と質のバランスに鑑みて、広域の緑との「生態回廊としての連続性」に配慮したものとする必要がある。その中で、豊中キャンパスと同様に、ササやタケの侵食をできるだけ限定的な範囲にとどめて行かなければならない（意匠上、部分限定的にササやタケを植栽として用いることはありうる）。

また、吹田キャンパスはサクラ、ケヤキ、クス、ポプラなどの並木が樹木のトンネルを構成し、街路景観の重要な要素となっている部分が多い。

なお、除草によって夏以降に開花する植物もあるので、今後吹田キャンパスに限らず、このような保護すべき植物を特定しながら、それらの開花時期に配慮して除草時期を調整することが望ましい。

吹田キャンパスでは、その広さと幹線街路によって形成されている空間の特徴から、図 5.03 に示すように通り系とエリア系に分けた分析と方針設定を行っている。

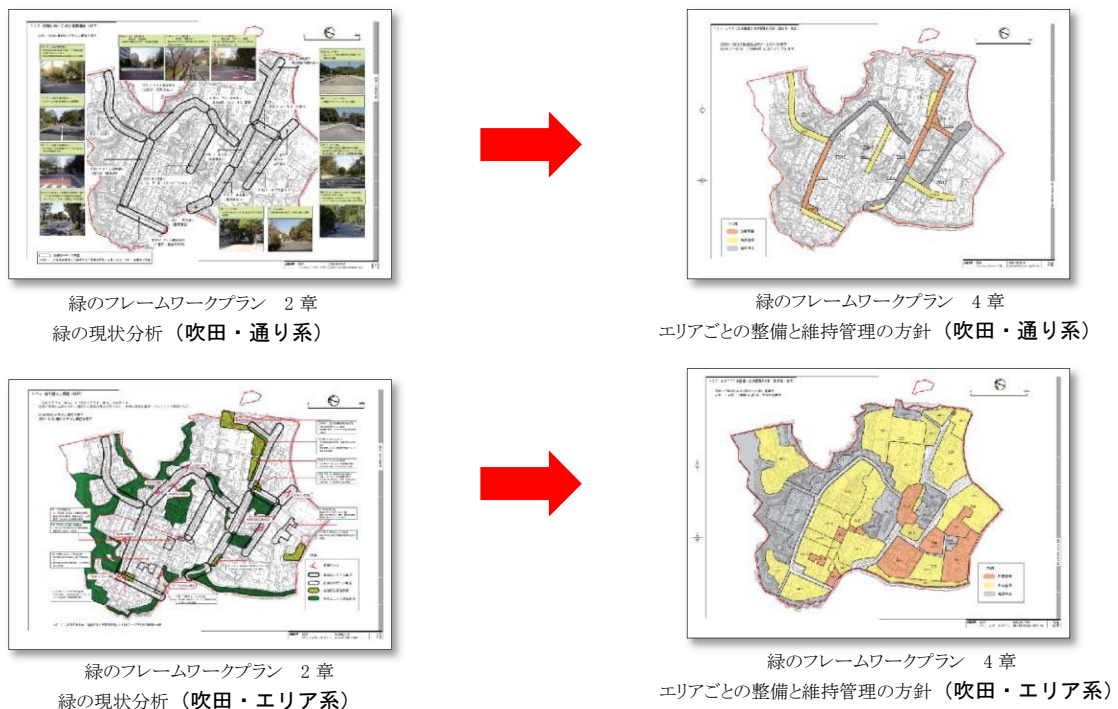


図 6.03b 緑のフレームワークプランにおける吹田キャンパスの考え方

(3) 箕面キャンパス

箕面キャンパスの外周部は、北摂山系の山麓部でアカマツを主体とする植生であった。わずかに残る自生植物の中には、吹田にも豊中にも見られない植物が観察できる。彩都の開発とともに周辺の自然が大幅に失われた。広域としてみると、みどりの骨格（河川・景観・道路軸）に沿った自然回復が必要である。

箕面キャンパスは大阪平野を見渡せる位置にあると同時に、これら北側の山麓部が借景となって、グランド周囲の緑と一体的な雄大な景観を持っている。特に秋には見事な紅葉が見られる。これらの資源を守り育てる整備と維持管理が必要となる。

但し、箕面キャンパスについては移転構想によって、これまでと全く異なる都市型キャンパスとしての考え方をとる必要があり、本章での考え方はあくまで2021（平成33）年春に予定されている移転までの暫定的なものとなる。

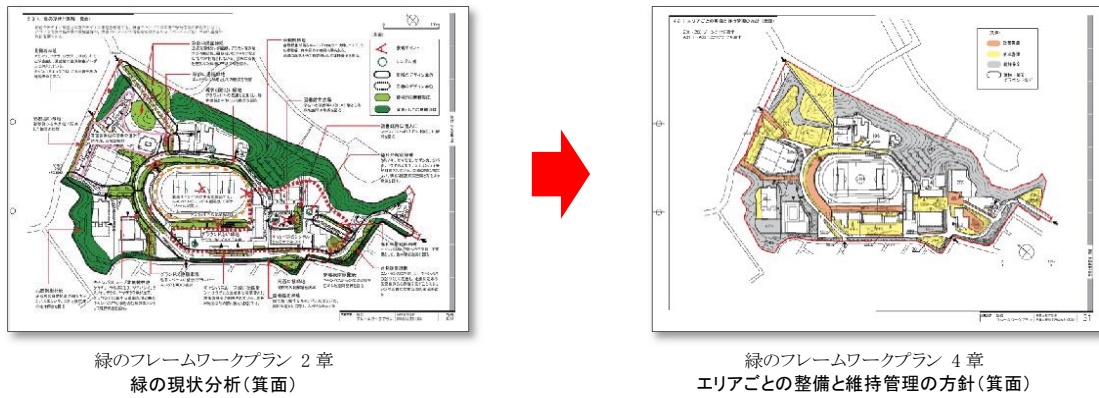


図 6.03c 緑のフレームワークプランにおける箕面キャンパスの考え方